

闇の中の日中関係

産経新聞
中国取材班 著

産経新聞社・二三八円



今世紀前半の最大の問題の一つが中国の行方であることは、ほぼ間違いない。その中国については、樂觀論や悲觀論が交錯しており、まだ判定はできないが、中国が世界的な強大国を目指していることは疑いないところである。だからこそ日本にとっては大変に厄介な存在であり、難しいパートナーなのである。

このような中国は、最近の経済成長の半面で凄まじい環境破壊をもたらしているばかりか、そのうえ軍事力の強化にもつとめているので、日本は冷静な分析力とよほどしっかりした外交戦略をもって中国との関係を律していかなければならない。

本書は、このような問題意識を私と

ほぼ共有するであろう産経新聞中国取材班が精力的に集中取材し、昨年七月から十月にかけて四十回にわたって『産経新聞』に連載した記事を基礎にしてまとめられたものである。

昨年は日中国交三十周年であったが、五月の瀋陽事件とそれをめぐる日中外交に象徴されたように、いわゆる「日中友好」関係が根本的に問い直されねばならない事柄が相次いだ。それだけに「亡命者連行事件の核心」「政界のチャイナスクール」「合弁企業に落とし穴」「なぜ見直さない対中援助」「政治に利用された友好」「国交なき日台友好の拡大」といった各パートの文章は、きわめて具体的に問題点を指摘していて、考えさせてくれる。「この

拉致救出運動の2000日

荒木和博編著
草思社・一九〇〇円

北朝鮮による拉致事件被害者の象徴的存在ともいえる横田めぐみさん事件が公になった一九九六年から、金正日の「自白・謝罪」や被害者五人の帰国で事件が劇的に展開した二〇〇二年までの関連論文や資料を集めた記録。運動が北朝鮮との闘い以上に、北朝鮮に媚びて事件に冷淡だった国内の「敵」との闘いでもあったことを浮かび上がらせている。

まさに「(他国の)国家犯罪の被害にあつた人びとの家族が、(自国の)政治家や官僚の妨害と闘わなければならない」という本末転倒の事態であり、運動は「それ自体恥ずかしい歴史」(著書後書き)でもある。

被害者やその家族の奪還だけではなく、この言葉をかみ締めなければならぬ人物たちの責任追及が終わらない限り事件は解決しない。

5年後こうなる

日下公人著

PHP研究所・一五〇〇円

著者は「五年後の日本と世界を考えてみた」という。アメリカの場合、中国の場合、ヨーロッパの場合……と問題山積の国から順番に考えていく。肝心の日本はどうか。政治であれ経済であれ、いま日本に関する将来予測は厳しく暗いものばかりが示されている。それこそ八方塞がりのように言う論者が多い。

だが果たしてそうか。将来が見えない原因は、日本自身の「特異性」、「先端性」にあると著者は説く。そして、「日本は余力十分」であり、実は「八方ひろがり」であると。前後左右に先入観や限界を置いて、日本の行く道はこちらしかない……と追い込んでいく従来の分析ではなく、日本の自発的・内発的な方向選択、パワーの可能性から検討すれば、ブレイクスルーの大いなる道筋が見えてくる。「眼からうろこ」の一冊である。

重要な問題点を平易に鋭く抉る快著

国と本当に付き合えるか?」との副題が示すように、中国という対象は、親日的で民主化された台湾とは大きく異なっており、心おきなく付き合える国では決してないことが、おのずと理解される。

本書は、四十本の記事が「不信の構造」「日本企業の苦悩」「曲がり角の援助」「交流の虚と実」の四部に分けて編成されているが、私にとっては中国報道の在り方についての記述が最も印象的であった。米国の『ニューヨーク・タイムズ』やフランスの『リベラシオン』といった外国の有数のメディアでは、鋭く掘り下げた中国報道がなされているのに、なぜ日本では不十分なのか、本書によって明らかにされている点(「メディア論議の不毛」)が特に興味深く、また重要であろう。「反中国報道を繰り返す右翼新聞に協力はしかねる」などという言辭が中国側か

とが理解される。文化大革命期以来の『産経新聞』の報道は、他社が台湾に支局を置かなかつた期間の台湾報道とともに、わが国マスメディアの良心の証しであり、救いでもあった。それだけに、日本の国益のためにも、ひいてはアジア地域の平和と安全のためにも、このような報道姿勢を今後とも是非堅持してほしいものである。

国際社会学者 中嶋嶺雄